

トルコ共和国イスタンブル西郊ブユク・チェクメジェ 石造橋についての覚書

井谷 鋼造
岩本 佳子

I

はじめに

2011年8月30日、この日はヒジュラ暦1431年のシャッワール月1日、すなわちこの年のラマダーン月が終了して3日間の休日に入った初日、かつトルコ共和国が定めた「勝利記念日」であり、イスタンブル市内中心部の繁華街では普段の賑わいが絶えた日であったが、筆者は一人イスタンブル西郊にあるブユク・チェクメジェの石造橋〔写真1〕を見学に出かけた。初めて見る石造橋は四つの大きなアーチ橋からなり、それを構成する小アーチの総数28という重厚長大な建造物で、その規模の壮大さを見る者を驚嘆させるに十分な迫力があった。橋の東側のたもとにある解説版によると、この石造橋は全長が636 m、幅7.17 mという長大な建造物で、建設に当たったのは有名な大建築家ミイマール・スイナーンであり、スルターン、スライマーン（大帝）がハンガリーのシゲトヴァル（Szigetvár）遠征にあたって建設を命じたものだが、この遠征中にスライマーンが病没した（1566.9.6.）ために、後継者であったサリーム（2世）が975（1567/8）年に完成させたものであるという。筆者はこの石造橋に残る石板銘文の調査に赴いたのだが、本稿ではこの石造橋に残る、その建設を記念したふたつの銘文を紹介し、併せて石造橋に関するふたつの歴史的な記録を紹介した

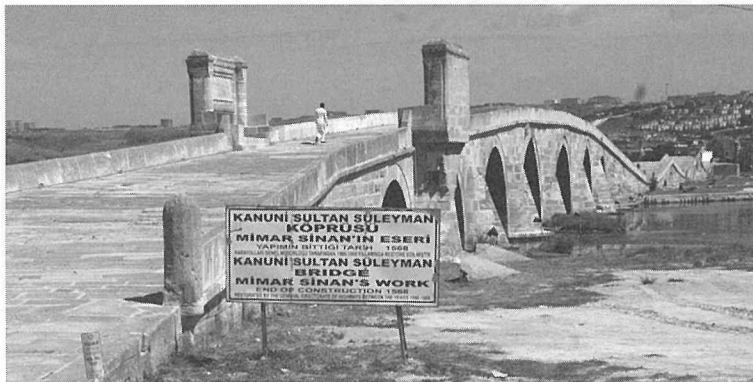


写真1

いと思う。

1 石造橋に残るふたつの石板銘文

イスタンブル市の西方、ヨーロッパ側のマルマラ海沿いを 30 km 余西方へ進んだところに Büyük Çekmece というマルマラ海につながる大きな汽水湖（潟）があり、この湖を東西に横断する石造橋の西端に近い橋上に二つの石板銘文が向かい合って設置されている〔写真 1〕。そのうち南面する銘文はアラビア語で 5 行分、対して北面する銘文はオスマーン・トゥルク語で 4 行分あり、同一の書家によって書かれていることが分かる。

（アラビア文字原文中の縦線は、改行を示す。_____部分は固有名詞，_____部分は支配者等の名前に付けられた修飾辞，_____部分は讃辞や追悼句を，（ ）は原文の補足，【 】は原語のカタカナ表記を示している。）

A. [南面する銘文] (アラビア語の原文) [写真 2]

قد اسس بنیان هذا الجسر اللطيف والمعبر المنيف لمرضات الله تعالى السلطان ابن السلطان سلطان سليمان خان
ابن سليم خان اللهم حفظه | من هول الصراط والميزان ثم انتقل المرحوم المغفور من الدنيا الدنيا الى جانب
الرحمة والجنان ثم جلس في تخت سلطنة ابنه السلطان وقد اتمه هذا | السلطان الاعظم والخاقان المعظم مولى
ملوك العرب والعجم ظل الله في الارضين السلطان ابن السلطان سلطان سليم خان ابن السلطان | سليمان ابن
السلطان سليم ابن السلطان بايزيد ابن السلطان محمد ابن السلطان مراد ابن السلطان محمد ابن السلطان بايزيد ابن
السلطان مراد | ابن السلطان اورخان ابن السلطان عثمان لا زالت سلطنته وابد دولته الى آخر الزمان تقبل الله
خيراتها بحق القرآن في سنة خمس وسبعين وتسعمائة كتبه درويش محمد

(日本語訳)

かつてスルターンの子のスルターン、スルターン、スライマーン・ハーン・イブン・サ
リーム・ハーン —— 神よ、彼を最後の審判の怖れから護りますように —— が至高なる神
の満足のために、この優雅な橋【ジスル】、広大な渡し場【マアバル】建設の基礎を置いた。
その後彼（スライマーン）は故人となり、低劣な現世から（神の）慈悲と楽園の方へと移住
し、その後息子のスルターンが即位した。そしてこの最大のスルターン、偉大なるハーカー
ン、アラブとアジャムの王たちの主人、大地にある者たちの神の影、スルターンの子のスル

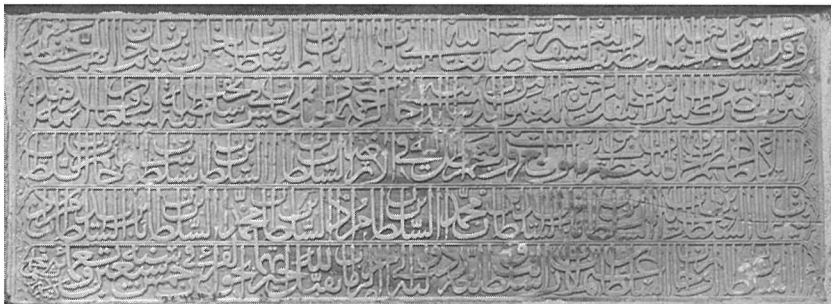


写真 2

ターン、スルターン、サリーム・ハーン・イブン・スルターン、スライマーン・イブン・スルターン、サリーム・イブン・スルターン、バーヤズィード・イブン・スルターン、ムハンマド・イブン・スルターン、ムラード・イブン・スルターン、ムハンマド・イブン・スルターン、バーヤズィード・イブン・スルターン、ムラード・イブン・スルターン、ウールハーン・イブン・スルターン、ウスマーン —— 彼の政権が絶えることなく、その国運が時の終わりまで永続し、クルアーンにかけて神が彼ら二人の善行を受け入れるように —— が 975 年にそれを完成した。これを書いたのはダルウィーシュ・ムハンマド。

B. [上記の銘文と正対して北面する銘文] (アラビア文字の原文) [写真 3]

حضرت سلطان سليمان كم اكا | شاه راه اوله صراط مستقيم | باشلدي بو جسر اولمادي بن تمام | قلدي عزم
سوي جنات النعيم | قلدي آني ظل حق سلطان سليم | اتدي تكميل اولدي بر جسر عظيم | ديدي تاريخن هداي
اول زمان | يابدي آب اوزره بو جسري شه سليم | كتبه درويش محمد

(転写) (//は詩行の切れ目を、/は半句の切れ目を示している。)

Hazret-i Sultân Süleymân kim ona / şâh râh ola sırât-ı müstaqîm // başladı bu cisr olmadı
bün tamâm // qıldı 'azm sû-yi cennâtul-na'im // geldi ânî zill-i haqq Sultân Selîm / etdi
takmîl oldı bir cisr-i 'azîm // dedi târihin Hudây ol zamân / yabdı âb üzere bu cisri Şeh Selîm
// katabahu Dervîş Muhammad

(日本語訳)

スルターン、スライマーン陛下 —— 彼にとって王道が真直ぐな道となるように —— がこの橋【ジスル】の(工事)を始めたが、基礎は完成しなかった。彼は安寧の樂園へと向かった。彼を継いで真理(神)の影であるスルターン、サリームが到来した。彼は(橋を)完成させ、それは巨大な橋となった。フダーイーがその時に年代を詠んだ。サリーム王が水上にこの橋を築いた、と。これを書いたのはダルヴィーシュ・ムハンマド。

(解説)

A の銘文中には石造橋を完成させたスルターン、サリーム・ハーンについて「最大のスルターン、偉大なるハーカーン、アラブとアジャムの王たちの主人、大地にある者たちの神の影、スルターンの子のスルターン」という 5 種類の修飾語が付せられ、また、初代のオス

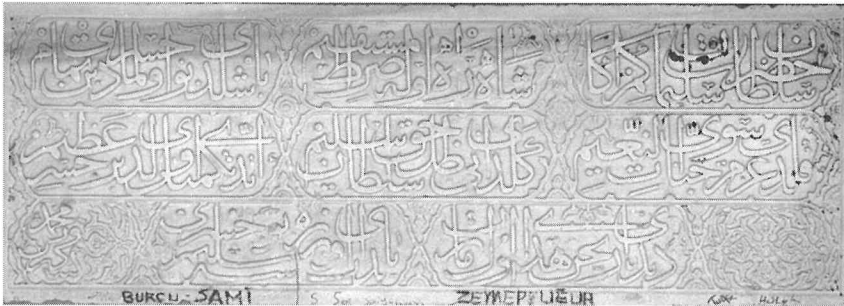


写真 3

マーンからサリームに至る 11 代のスルターンの名前が系譜順に全て記されている。筆者のこれまでの調査によると、当代までのスルターンたちの名前が全て記された石板銘文は、ディメトカ（エディルネの南方、現ギリシア領）のスルターン、ムハンマド 1 世ジャーミウ（1420 年、全 5 代）[井谷 2008：4-⑤銘文]、イスタンブルのファーティフ・ジャーミウ（1463 年、全 7 代）[井谷 2005：16-22]、スライマーニーヤ・ジャーミウ（1557 年、全 10 代）、スルターン・アフマド・ジャーミウ（1616 年、全 14 代）[井谷 2009：銘文⑦、⑩] の 4 点しかなく、これらがいずれもそれぞれの時代を代表する、非常に著名な建物に付せられていることを考慮すれば、この石造橋の銘文も文字が流麗で美しく、サイズが大きく立派なものであることからスルターン、サリーム時代を代表する刻銘文資料のひとつであると考えられよう。この銘文の本体から少し離れて、左右の上隅にこの銘文と同じ筆跡で次のような 2 点の石板銘文があり、それぞれの位置は離れているが、内容的には連続している内容である。[写真 4 & 5]

（アラビア文字の原文、間にある縦線より前の部分が右上隅端、後の部分が左上隅端）

عمل يوسف بن عبد الله | غفر الله له وللمباشرين

（日本語訳）

ユースフ・ブン・アブドゥッラーフが造った。神が彼と実行者たちを赦すように

この部分は石造橋建設の施工者の名を挙げたもので、ミイマール・スィナーンの名は見えないが、建築家スィナーヌッディーンの本名であるユースフが示されているのである。「ユースフ・ブン・アブドゥッラーフ」という名乗りからは、彼の父がアブドゥッラーフであったことが窺われるが、スィナーン一族はムスリムの家系ではなく、元来アナトリアはカイセリ出身のルーム系であり、デヴシルメによってオスマーン朝の宮廷に出仕したことはよく知られている。従って彼の父は異教徒（キリスト教徒）であり、このような場合、父親の名は「アブドゥッラーフ」となるのが通例である。イスラームの預言者ムハンマドの父アブドゥッラーフは、ムハンマドの生誕前に死去したことが知られているが、当然アブドゥッラーフはムスリムではなかった。これに因んだものか、イスラーム世界での新改宗者が自ら



写真 5



写真 4

の系譜（ナサブ）を示す場合、異教徒であった父親名が仮にアブドゥッラーフとされていたのであり、実名を示すものではないと考えられる。

Bの銘文は、前掲Aの銘文と比べると字数が少なく、オスマーン・トゥルク語の韻文で書かれていることが特徴であり、韻律は、長短長長／長短長長／長短長の音節順になるラマル韻が用いられている。銘文に年代は現れていないが、「サリーム王が水上にこの橋を築いた」の部分のアラビア文字（يابدی آب اوزره بو جسري شه سليم）をアブジャド順のクロノグラムで読めば、A銘文と同じ975年という年代が読み取れる¹⁾。オスマーン朝期の16世紀前半までは、特に遺例の多いマスジド・ジャーミウなどの建造物の創建、修復等を記録する刻銘文資料は、12世紀のセルジューク朝時代以来、前掲A銘文のように、専らアラビア語で書かれており、16世紀後半になってからはオスマーン・トゥルク語による銘文が残され始め、17世紀以降アラブ地域を除くオスマーン帝国領内ではそれが主流になっていくというのが、筆者のこれまでの刻銘文資料調査の結果と経験から得られた刻銘文資料上の使用言語に関する歴史的概観であるが、その見通しから言えば、アラビア語の主銘文と位置的にも対になったBの銘文はこれ以後、トゥルク語の銘文が増加していく時期の最も早い例の一つであると考えられるのである。これらふたつの銘文を書いたダルヴィーシュ・ムハンマド（1591年没）という人物は、能書家アフマド・カラヒサーリーに書を学び、「カラヒサーリー・デルヴィーシュ」という名で知られていた²⁾。

2 ミイマール・スィナーンの墓所に掲げられた石板銘文

イスタンブル市内の観光名所のひとつであるスライマーニーヤ・ジャーミウ（スュレイマニエ・ジャーミイ）の構内の西北端に近く、ジャーミウの構内から狭い道を挟んだ一隅にオスマーン帝国を代表する建築家スィナーンのごく小さな墓所に、南面する以下のような石板銘文が掲げられている。

（アラビア文字の原文）〔写真6〕

ای ایدن بر ایکی کون دنیا سراینده مکان | جای آسایش دکلدن آدمه ملک جهان | خان سلیمانته اولوب معمار بو
مرد گزین | یابدی بر جامع ویرر فردوس اعلان نشان | امر شاهيله قلوب صو یوللرینه اهتمام | خضر
اولوب آب حیاتی عالمه قلدی روان | چکمه جسرينه بر طاق معلا چکدیم | عیندر آیینه دورانده شکل
کهکشان | قلدی دورتیوزدن زیاده مسجد عالی بنا | یابدی سکسان یرده جامع بو عزیز کاردان | یوزدن ارتوق
عمر سوردی عاقبت قلدی وفات | یاتدوغی ییری خدا قلسون انک باغ جنان | رحلتینوک ساعی داعی دیدی
تاریخی | کچدی بو دمده جهانن پیر معماران سنان ۹۹۶ | روحیچون فاتحه احسان ایده پیر و جوان

（転写）（／は詩行の切れ目を、/は半句の切れ目を示している。）

1) ふたつの銘文は Çulpan 1975 [144-145] にテキストが掲げられており、解説結果は筆者のものと同一である。

2) Türk İslam Sanatları Hat Dergisi, Hattat Kronolojisi の情報による。

http://www.hatdergisi.com/HAT%20DERG%C4%B0S%C4%B0/hattatlar_kronolojisi.htm

ey eden bir iki gün dünyâ serâyında mekân / cây-i âsâyış değıldir âdeme mülk-i cihân // Hân
 Süleymâna olup mi'mâr bu merd-i gūzîn / yapıdı bir câmi' verir firdevs-i a'lâdan nişân //
 emr-i şâhiyle qılup su yollarına ihtimâm / Hidr olup âb-i hayâtı 'âleme qıldı revân //
 Çekmece cisrine bir tâq-i mu'allâ çekdi-kim / 'aynıdır âyine-yi devrânde şekli-i kehkeşân //
 qıldı dörtyüzden ziyâde mescid-i 'âlî binâ / yapıdı seksen yerde câmi' bu 'azîz-i kârdân //
 yüzden artuq 'ümrü sürdi 'âqibet qıldı vefât / yattuğı yeri hüdâ qılsun anın bâğ-ı cinân //
 rihletinün sâî dâî dedi târîhini / geçdi bu demde cihândan pîr-i mi'mârân Sinân 969 //
 rûhiçün fâtiha ihsân ede pîr-ü-cevân

(日本語訳)

おお、現世という宮殿に1, 2日の宿りをなす者よ！人にとって世界の王権は安寧の場所に非ず。この選ばれた男は、スライマーン・ハーンの建築家【ミイマール】となり、至高の楽園を提示する、一つのジャーミウを造った。王命により水道を整備し、世界に命の水を流すヒドルとなった。チェクメジェの橋【ジスル】に、時代の鏡に写る虹型の高いアーチを架けた。400以上の高いマスジドを建設した。この技高き偉人は80箇所でジャーミウを造った。100歳以上の生涯を過ごし、亡くなった。その寝所を神が彼の楽園の庭とするように。彼が逝去の年代を、努める者、祈る者が言った。建築家の長者スィナーン、この時世を去った。996年。老いも若きも彼の魂にファーティハを贈るように。

(解説)

この銘文は、7行からなるオスマーン・トゥルク語の韻文で書かれており（最終行の第8行は半句で終わっており、この半句は通常の墓碑銘で使用される表現である。）、使用された韻律は長短長長/長短長長/長短長長/長短長のラマル韻である。最終の7行目後半の半句にある (كچدی بو دمدہ جهاننن پیر معماران سنان) 「建築家の長者スィナーン、この時世を去った」の部分のアラビア文字アブジャド順のクロノグラムで読めば、996 (1587/8) 年という彼の没年が示される。

この銘文中では最初の行の「1, 2日」と対照的に、400, 80, 100などの数字がいずれもトゥルク語の数字で表現されているが、その数ある作品の中でも「チェクメジェの橋」が固有名詞として唯一挙げられているのは、スィナーンの数多い、また優れた作品の中でもこの橋がとりわけ卓越し、また名高いものであったことを示している。銘文中に現れる、スィ

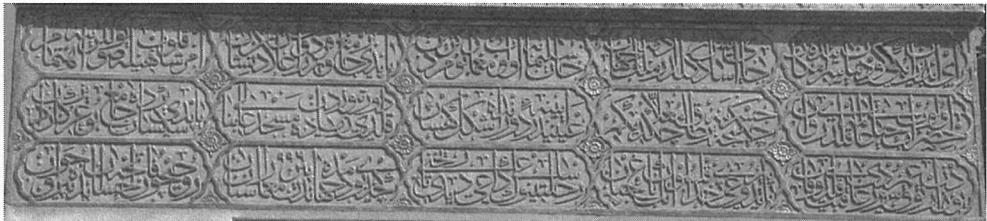


写真6

ナーンを譬えた「世界に命の水を流すヒドル」という表現は、イスラーム世界におけるアレクサンドロス伝説にも登場する「生命の泉」に辿り着いた男ヒドルにまつわる伝説に由来するものである [山中 2009 : 163-164]。

3 石造橋についてのエヴリヤー・チェレビーの記録

18世紀のオスマーン朝の旅行家エヴリヤー・チェレビーは、その旅行記³⁾の中で、ブユク・チェクメジェの石造橋について何度か言及しているが⁴⁾、この石造橋について次のような描写を残している。

大チェクメジェ (Çekmece-yi Kebîr) の見事な橋梁【ジスル】の描写

この湖に架かり、創建したのはスレイマーン・ハーンである。完成できず、セリーム・ハーン 2 世が⁵⁾、コジャ・ミイマール・スイナーンの手で完成させた。全部で 26 の虹のようなアーチは天に届くほどで、その一つ一つが虹のごとくである。北から南への長さはきっかり 1 ミールである。山を穿つフェルハード (Ferhâd-i kühken) の鑿の手で削られ、磨き込まれた石で建造された堅固な橋であり、オスマーン朝の国土 (memâlik-i Âl-i 'Osmân) において、Geyve の橋⁵⁾、Osmançik のアーチ橋⁶⁾、アマサヤの橋⁷⁾、Batman の橋⁸⁾、Çoban 橋、Altun Halkalı 橋、ルーメリでは Vişegrad の橋⁹⁾、Mostar の橋¹⁰⁾ のような橋に似ており、無類の立派な、丈高い橋である。これもまた

-
- 3) 本稿で用いた 10 巻本テキスト [Evlîyâ Çelebi Seyahatnâmesi] は Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Bağdad Köşkü 304, 305, 306, 307, 308, Revan 1457 などの写本を基にラテン文字転写と索引を付したものである。
- 4) 1. Kitap, ed. Orhan Şaik Gökyay (1996), p. 66; 3. Kitap, eds. Seyit Ali Kahraman & Yücel Dağlı (1999), p. 169; 5. Kitap, eds. Seyit Ali Kahraman, Yücel Dağlı & İbrahim Sezgin (2001), pp. 170, 289; 6. Kitap, eds. Seyit Ali Kahraman & Yücel Dağlı (2002) p. 293.
- 5) イスタンブル東方にある Adapazarı の南方、サカリヤ河に臨む町。この町にはスルターン、バーヤズィード 2 世時代の 901 (1495/6) 年に完成した石造橋がある。この橋については Çulpan 1975 [116-119] に橋とその創建年代を記した石板銘文についての解説がある。銘文は Tüfekçioğlu 2001 [446-450] にもテキストが採録されている。
- 6) アナトリア中北部 Çorum の北方、クズル・ウルマク (赤い河) 中流に臨む町。この町にはスルターン、バーヤズィード 2 世時代の 889 年シャアバーン月 (1484 年 8-9 月) 年に完成した石造橋がある。Çulpan 1975 [112-115] に橋とその創建年代を記した石板銘文についての解説がある。銘文は上掲 Tüfekçioğlu 2001 [437-440] にテキストが採録されている。
- 7) アナトリア中北部アマサヤ市内を貫流するイエシル・ウルマク (緑の河) に架かる橋 [Çulpan 1975 : 75-76]。最も規模の大きな通称 Kuş Köprüsü はセルジユク朝期に造られたものらしいが、銘文等は残っていない。
- 8) アナトリア南東部、ディジラ (ティグリス) 河の支流のひとつの名である Batman Suyu に架かる Malabadi Köprüsü のこと。Çulpan [1975 : 40-44] によれば、残っている銘文の一部から 542 (1147/8) 年アルトゥク朝時代に造られたことが分かるという。
- 9) ルーメリ (バルカン半島側) 地方、ボスニアの町。Çulpan [1975 : 164-166] によれば、ムラード 3 世時代の 985 (1577/8) 年に大宰相ソコルル・メフメド・パシャが建築家スイナーンに命じてこの町を流れるドリナ河上に造らせたもの。ユネスコ認定世界文化遺産。
- 10) ルーメリ地方、ヘルツェゴヴィナの中心都市。Çulpan [1975 : 164-166] によればスライマーン

ルーメリへ往来する者たちが通過する、見事な大橋梁である。大変に幅が広く、海陸を旅する者たち全ての間で、世に名高い連続するアーチ橋 (qantara-yi tâq-ı revâq) である。橋の中央、白大理石上に、カラヒサーリー・ハサン・チェレビーの筆跡で、オスマーン家の父祖の名前と共に、「アラブとアジャムの諸国のスルターン、スルターンの子のスルターン、スルターン、サリーム・ハーン・イブン・スルターン・スライマーン・ハーン・イブン・某・某、その最後はオスマーン家まで」と書いている。実に大理石を刻む棟梁が大理石の上に書き、刻んでいるが、現在、我々の時代の棟梁たちは、それに鑿や錐を入れることは出来ない。この魔法の痕跡の文字の下に書かれているのは、橋の建造年代である。

フダーイーがその時、年代を言った。セリーム王が水上にこの橋を造った。975年。もうひとつの年代：橋の事業が完成した。975年。{フダーイーのもうひとつの年代：スルターン、セリームがスレイマーンの橋を完成した。975年。

架橋にかかった費用は、11,473,853 アクチェが費やされた。} ¹¹⁾ 要するに、全ての橋の描写において Ergene 橋の称賛に次いで、チェクメジェ橋が世に褒め称えられ、世に名高いのである。平安あれ。[3. Kitap, p. 169]

この記述は、大チェクメジェの石造橋を描写しながら、この石造橋はオスマーン朝領土内の Geyve, Osmançık, Amasiyye, Batman, Vişegrad, Mostar, Ergene ¹²⁾ 等の橋と並ぶ著名な建造物であるとしている。しかし、この記述の中には幾つかの不正確な内容があり、まず「北から南への長さはきっかり 1 ミールである」というのは明らかに誤りである。この石造橋はブユク・チェクメジェのマルマラ海への開口部に近く位置し、南北ではなく、東西方向に架かっている。現地を訪れたことがある者にとっては、一目瞭然であり、その長さも 630 m 余であり、「1 ミール」すなわち 1 マイル (≒1.6 km) にはるかに及ばない。エヴリヤー・チェレビーの引用している大理石上の銘文の内容も極めて粗雑で、アラビア語文、トゥルク語文の両方を書いた人物の名は「ダルヴィーシュ・ムハンマド」と両方の銘文末尾に明記されているにもかかわらず、「カラヒサーリー・ハサン・チェレビー」¹³⁾ の筆跡であるとしているのは全く合点がいかない。上述のように、この銘文の筆者がアフマド・カラヒサーリーの弟子であったことは確かなようだが、アフマド・カラヒサーリーの養子であったというハ

¹⁾ 1 世時代の 974 (1566/7) 年に建築家ハイレッディーンに命じてこの町を流れるネレトヴァ河上に造らせたもの。ユネスコ認定世界文化遺産。

11) { } の部分は、欄外に書かれたものを、他の写本との照合などを経て、テキストに組み入れたものであるという。

12) *Evlîyâ Çelebi Seyahatnâmesi* [5. Kitap, pp. 170-171] にこの橋の記述があるが、それによれば、この橋は東トラキアの Uzunköprü に当るようである。Çulpan [1975: 98-105] によれば、この橋にはムラド 2 世時代の 847 (1443/4) 年に竣工したことを示すアラビア語の石板銘文が残されている。

13) この人物は、イスタンブルのスレイマニエ・ジャーミイ入口上方の石板銘文の筆者「ハサン・ブン・アフマド・カラヒサーリー」として知られている [井谷 2009: 銘文②の解説]。

サンとは別人である。また、エヴリヤー・チェレビーが「オスマーン家の父祖の名前と共に、「アラブとアジャムの諸国のスルターン、スルターンの子のスルターン、スルターン、サリーム・ハーン・イブン・スルターン・スライマーン・ハーン・イブン・某・某、その最後はオスマーン家まで」と書いている」というのは、エヴリヤー・チェレビーがこの石板銘文を精確に読めなかったことを示す証拠としか理解できないのである。

エヴリヤー・チェレビーの旅行記の記事には著作当時のオスマーン朝領土内で有名な橋の列挙など有益な情報もあるが、以上に取り上げたように、その内容は検証を要するものが多く、それらはこの旅行記の内容を参照・利用する者が具体的に調査、検討しなければならないということを示している。

おわりに

以上、本稿ではブユク・チェクメジェ石造橋の創建にかかわる三つの石板銘文の内容を紹介し、併せてエヴリヤー・チェレビーの旅行記の記録を覚書として挙げてみた。それぞれの記述は簡単で、それらが特に大きな歴史的意義を有するわけではないが、現在も優美にして堅固な姿を留めるブユク・チェクメジェの石造橋¹⁴⁾は、世界的な文化遺産として第一級の規模と歴史を有するものであり、大建築家スィナーンの設計・構想により、オスマーン帝国の最盛期を象徴する壮大な建造物として歴史的な価値が高いと言ってよい。また、この石造橋が単なる歴史的な遺物としての意味だけでなく、歴史的な大都市イスタンブル（クスタンティニーヤ）とルーメリ各地を結ぶ、軍事的、経済・産業的な物資や人の流れの結節点となったという意味で重要な役割を担っていたことは言うまでもない。

(井谷鋼造)

II オスマーン朝文書史料にあらわれるブユク・チェクメジェ橋

I 問題の所在

スィナーンの傑作の一つに数え上げられるブユク・チェクメジェ橋をめぐるには、良好な状態で保たれた銘文史料やスィナーンの伝記を史料とした多くの先行研究が存在する。それらの研究により、ブユク・チェクメジェ橋の建造がオスマーン朝君主スレイマーン1世（在位1520-66年）により命じられ、スィナーンの指揮で975年（1567-68年）¹⁵⁾に建造が完了したことが明らかとされてきた〔Çulpan 1975: 142-47; Eyice 1992b〕。

しかし、先行する研究が必ずしも明確に述べていないこともいくつか残されている。例え

14) 現在、この石造橋の南方、マルマラ海沿いに新しい鉄橋が架かっており、主要幹線交通路はそちらを通過している。

15) 以下、ヒジュラ暦（西暦）の順で表記する。

ば、橋の建造が始まった年については、スレイマーン1世により建造されたことを指摘することでスレイマーン1世の治下であると大半の先行研究は推察するのみである。唯一、コンヤルは「ブユク・チェクメジェにあるミイマール・スィナーンの傑作である橋の建造は、1566年に偉大なるスルターン・スレイマーンがシゲトヴァル Zigetvar 遠征へ行く際に始められたという¹⁶⁾。」と述べているのみである [Konyalı 1963: 3234]。これは、叙述史料、銘文史料ともに建造の開始年については何も述べていないためである。このように、叙述史料と銘文史料からは未だに解明されていないことがブユク・チェクメジェ橋には残されている。

そこで本章では、先行研究ではほとんど利用されていない史料¹⁷⁾であるオスマーン語文書史料を用いて、「ブユク・チェクメジェ橋の建造」がスレイマーン1世、セリーム2世治下のオスマーン朝の中でどのような意味や重要性を持っていたのかを考察する。

2 史料と研究の手法

本稿では、枢機勅令簿 *mühimme defteri* と呼ばれる史料を主に用いる。枢機勅令簿の大半は首相府オスマン文書館の枢機勅令簿フォンドに収録されている。この枢機勅令簿はかつては「御前会議重要議事録」と邦訳されることもあったが、実際には、オスマーン朝の最高の意思決定機関である御前会議 *divân-ı hümayûn* で決定された命令について、宛先、発布に至る経緯とその内容、発布日を記した勅令の概要記録簿である [Emecen 2005; 澤井 2006; 高松 2005]。

本稿では、ブユク・チェクメジェ橋の完成年前後に作成された973年(1565-66年)作成 MHM. d. 5, 972年(1564-65年)作成 MHM. d. 6¹⁸⁾, 975-76年(1567-69年)作成 MHM. d. 7の計3冊の枢機勅令簿の中に登場するブユク・チェクメジェ橋関係の命令を用いた¹⁹⁾。

3 枢機勅令簿に見るブユク・チェクメジェ橋建造関連命令

3-1 建築資材の調達

枢機勅令簿の中で、ブユク・チェクメジェ橋建造に関する最初の命令は972年ズルヒッジャ月3日(1565年7月2日)に、黒海沿岸の町であるアフヨル *Ahyol*²⁰⁾ 郡のカーディー

16) スレイマーン1世最後の親征であり、スレイマーン1世が陣中に没することになるハンガリーのセゲト遠征を指す。トルコ語名はシゲトヴァルもしくはジゲトヴァル。セゲトの町は974年ムハラム月18日(1566年8月5日)からオスマーン軍の包囲を受け、9月5日にオスマーン朝へ降伏した。

17) 唯一、トゥールルが橋の建造にかかった費用を1944年現在の貨幣価値に換算するために、文書史料を用いている [Tuğrul 1944: 114]。

18) 番号とは逆に、MHM. d. 6はMHM. d. 5よりも作成年が1年古い。

19) 首相府オスマン文書館所蔵枢機勅令簿より古いトプカプ宮殿博物館附属文書館および図書館所蔵枢機勅令簿も確認したが、ブユク・チェクメジェ橋に関する勅令は確認できなかった。

20) 現ブルガリア領ボモリエ。

宛に出された命令 [MHM. d. 6 : hkm. no. 1337 ; MHM. d. 6-2 (tr.) : 287]²¹⁾ である。

(前略) 以前に、水道の重要事のために、マスト用の材木 (サビナビヤクシン) *vüdrünar*²²⁾ が重要かつ必要であったために、その長さは 15 ズイラーウ²³⁾ (腕尺)、太さは 5 パルマク (指尺)²⁴⁾、その平坦さ *yassılık* は 7 パルマクのマスト用の材木を切り出させるよう、我が伝令 *çavuş* のオメルとともに、一定額の金 *akçe* が送られた。我が命令に従って、306 本のマスト用の材木が切られ、用意と準備を行ったという。現在、建造される予定のブユク・チェクメジェ橋の重要事 *Büyükçekmece köpüsünün mühimmâtı* のために、急いで [先に] 述べたマスト用の材木を運んでくることは重要である。よって私は以下のように命じた。

我が崇高なる宮廷のしもべの内、我がしもべのイスケンデルが到着したら、[先に] 述べたマスト用の材木は何本あるのか、それぞれの木の長さ太さ平坦さはどの程度か、その全てが同じ種類 [の木] か、そうでなければたくさんの種類 [の木] があるのかを知らせるように。種類ごとに記録して台帳に記した後は、遅延や遅滞がないように、到着した 2 匹の馬を船に乗せ、[その場に] ある [材木] を日雇い労働者 *rençper* が船に乗せて、その [記録を記した] 台帳と前述の我がしもべ [イスケンデル] と一緒にブユク・チェクメジェの港に送るように。(後略)

「現在、建造される予定の *hâliyâ binâ olunacak* ブユク・チェクメジェ橋」という表現から、ブユク・チェクメジェ橋の建造開始年は、972 年 (1565 年) かその前と推察できる。972 年は、スレイマーン 1 世がシゲトヴァル遠征を行うために命令を数度、発布した時期 [MHM. d. 6 : hkm. no. 271, 393, 1383 ; MHM. d. 6-1 (tr.) : 151, 213-14 ; MHM. d. 6-2 (tr.) : 315-16] でもあり、遠征と橋の建造との関わりが示唆されよう。

さらに、橋の建造に必要な材木として、おそらくはバルカン山脈の森に生えるビヤクシンの大木を切り出し、黒海沿岸まで運び出していたこと、切り出された材木はオスマーン朝の中央から派遣された役人の指揮下で、橋の建設現場まで海路で運ばれていたと分かる。

材木については、973 年ラビーウ I 月 14 日 (1565 年 10 月 9 日) 発布命令 [MHM. d. 5 : hkm. no. 472] でも言及されている。ここでは、橋の建設に使うための材木を運ぶために、ルーメリ州フィリベ *Filibe*²⁵⁾ にいるラクダを供出するよう命じている。16 世紀のオスマーン

21) 参照のため、枢機勅令簿に付されている命令番号を hkm. no. と略記してコロンの後に記した。

22) *burdinar*, *bordınar*, *birnar* とも。船のマストもしくはマストに使う丈夫でまっすぐな木材。一説にはサビナビヤクシン *Juniperus sabina* [Dankoff 2008 : 76]。1 隻のガレー船を建造するためには 9 メートルの高さのビヤクシンの材木が必要であったという [Bostan 2005 : 203-04]。枢機勅令簿にも船の建造に関する命令の中でこの語はしばしば登場する。

23) アルシュンの別名。時代と地域により異なるが、約 65-76 センチメートル。15 アルシュン / ズイラーウは約 10 メートル。

24) アルシュン / ズイラーウの 24 分の 1。約 3 センチメートル。5 パルマクは約 15 センチメートル。7 パルマクは約 21 センチメートル。

25) 現ブルガリア共和国領プロヴディフ。現在もオスマーン朝時代に建てられたモスクが町の中心

朝において、現在のブルガリアが橋を建造するための材木の供給基地になっていたことがここからうかがえよう。

石造橋であるブユク・チェクメジェ橋を建造するためには当然ながら石材が必要である。973年ラビーウⅡ月19日(1565年11月13日)にプナルヒサル Pınarhişarı²⁶⁾のカーディーに宛てて発布された命令では、橋の建材として石灰岩を焼いて石灰をつくる kireç ihrāk ことが必要であるため、ソクチャク Şokuçak 村の石灰工 kireççi を供出することを命じている [MHM. d. 5: hkm. no. 245]²⁷⁾。

3-2 建築労働者の徴用

橋の建造にあたっては、石灰や材木の用意、運搬以外にも多数の人が動員されていた。橋建造のための労働者確保に関する命令は、上記の命令以外にも存在する。

973年シャバーン月7日(1566年2月27日)には、ヴィゼ²⁸⁾・ユリュクのスバシ Vize Yörükleri subaşı²⁹⁾のピーリー管轄下にあるジャンバズ cānbāz, タートル tātār, ユリュク yörük にチェクメジェの橋の奉公 Çekmece köpri hizmeti に来ることが命じられた [MHM. d. 5: hkm. no. 1102]。

また、973年ラマダーン月16日(1566年4月6日)発布命令 [MHM. d. 5: hkm. no. 1379] では、チェクメジェで建造される橋の奉公にヤヤ yaya やミュセッレム müselleme を供出するように命じている。

この記述の中に登場するジャンバズ, ユリュク, タートル, ヤヤ, ミュセッレムは、いずれも諸税の免税と引き換えに、オスマーン朝の命令や指揮に従って、遠征への参加、大砲や砲弾の輸送と製造、造船といった、必要に応じて様々な仕事に従事する奉公役の集団である [Doğru 1990; Gökbilgin 1957; 岩本 2012; 岩本 2014]。

ブユク・チェクメジェ橋の建造のためには、木材や石材といった建材やその建材を扱う職人、さらに労働力を提供する奉公役の集団が、バルカン半島の近隣地域各地から集められていた。ブユク・チェクメジェ橋の建造は、オスマーン朝の様々な人々と資材を投入した一大事業であったのである。

3-3 橋完成後のブユク・チェクメジェ

976年レジェプ月7日(1568年12月26日)つまりブユク・チェクメジェ橋の完成後に発

²⁴⁾ にあり、多くのトルコ系住人が住んでいる。

26) クルクキリセ, エディルネの東に位置する郡。

27) 現在もクルクラレリ県では、ブルガリアから伸びるストランジャ山地の南麓一帯に石灰岩の鉱床がある。

28) 現トルコ共和国領クルクラレリ県ヴィゼ市。

29) 都市の治安維持役、各郡の郡都規模の町の執政官などの様々な役職をつとめ、戦時にはティマルを受給する騎兵 sipāhī を率いて遠征へ向かう役職。

布された命令 [MHM. d. 7: hkm. no. 8; MHM. d. 7-1 (tr.): 4] は、ヤンボル Yanboli³⁰⁾、ドブルジャ[†](D)obruca³¹⁾、アクタヴ Akṭav・タタールをチェクメジェ橋での奉公に出動させるよう命じている。ブユク・チェクメジェ橋は完成直後に洪水で橋の一部が破損し、スイナーン指揮のもとで橋の修理を行った [Eyice 1992b]。おそらくこの橋の修理に上記のタタールは呼び出されたのであろう。

975年ラビーウ I 月 27日 (1567年 10月 1日) に発布された命令では、セリーム 2世がイスタンブルからエディルネに移動するにあたり、ブユク・チェクメジェの宿場 *konak* に小麦や牧草を準備することが命じられている [MHM. d. 7: hkm. no. 287; MHM. d. 7-1 (tr.): 147-48]。この他、975年ラジャブ月 22日 (1568年 1月 22日) 発布命令でも、ブユク・チェクメジェはサファヴィー朝使節の宿泊場所となっている [MHM. d. 7: hkm. no. 744, 746; MHM. d. 7-1 (tr.): 362-63]。

さらに、976年ジュマダー II 月 23日 (1568年 12月 13日) 発布命令 [MHM. d. 7: hkm. no. 2629; MHM. d. 7-3 (tr.): 325] では、ブユク・チェクメジェの商館 *hân* には、50人の召使 *oĝlan* がいると述べている。この商館は、スイナーンにより建造されたと言われており、現存するブユク・チェクメジェ・キャラヴァンサライのことであろう [Eyice 1992a; Yücel 1971: 99-100]。

橋が建造されたことで、ブユク・チェクメジェはイスタンブルとエディルネやトラキア西部を結ぶ道の交通の要所としてその価値を高め、オスマーン朝はその維持と管理に気を配り続けていたのである。

(岩本佳子)

参考文献

Evliyâ Çelebi Seyahatnâmesi, 1.-10. Kitaplar. İstanbul. 1996-2007.

MHM. d.: Başbakanlık Osmanlı Arşivi, Mühimme Defterleri (A. İDVNSMHM. d.) nr. 5-7.

MHM. d. 6-1 (tr.): *6 Numaralı Mühimme Defteri (972/1564-65): Özet ve Transkripsiyon ve İndeks*, 1. Ankara, 1995.

MHM. d. 6-2 (tr.): *6 Numaralı Mühimme Defteri (972/1564-1565): Özet ve Transkripsiyon ve İndeks*, 2. Ankara, 1995.

MHM. d. 7-1 (tr.): *7 Numaralı Mühimme Defteri (975-976/1567-1569): Özet-Transkripsiyon-İndeks*, 1. Ankara, 1998.

MHM. d. 7-3 (tr.): *7 Numaralı Mühimme Defteri (975-976/1567-1569): Özet-Transkripsiyon-*

30) バルカン山脈の南麓にあたる。現ブルガリア領ヤンボル。同地にはオスマーン朝支配下で建てられたモスクが現在も残っている。

31) 黒海の北西岸、ブルガリアとルーマニアにまたがるドナウ川下流のドナウ・デルター帯を指す地名。ブルガリア語、ルーマニア語ではドプロジャ。

İndeks, 3. Ankara, 1999.

- Bostan, İ. (2005) *Kürekli ve Yelkenli Osmanlı Gemileri*. İstanbul.
- Çulpan, Cevdet (1975) *Türk Taş Köprüleri Ortaçağdan Osmanlı Devri Sonuna Kadar*. Ankara.
- Dankoff, R. (2008) *Evlîyâ Çelebi Seyahatnâmesi Okuma Sözlüğü* (YKY'de I. baskı). İstanbul.
- Doğru, H. (1990) *Osmanlı İmparatorluğu'nda Yaya-Müselleme-Taycı Teşkilatı: XV. ve XVI. Yüzyılda Sultanönü Sancağı*. İstanbul.
- Emecen, F. M. (2005) Osmanlı Divanının Ana Defter Serileri: Ahkâm-ı Mirî, Ahkâm-ı Kuyûd-ı Mühimme ve Ahkâm-ı Şikâyet. *Türkiye Araştırmaları Literatür Dergisi*, 3-5, 107-39.
- Eyice, S. (1992a) Büyükçekmece Kervansarayı. In: *Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi*, 6, İstanbul, 519-20.
- Eyice, S. (1992b) Büyükçekmece Köprüsü. In: *Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi*, 6, İstanbul, 520-21.
- Gökbilgin, M. T. (1957) *Rumeli'de Yürükler, Tatarlar ve Evlâd-ı Fâtihân*. İstanbul.
- Konyalı, İ. H. (1963) Büyükçekmece Köprüsü. In: *İstanbul Ansiklopedisi*, 6. İstanbul, 3230-34.
- Tüfekçioğlu, Abdülhamit (2001) *Erken Dönem Osmanlı Mimarisinde Yazı*. Ankara.
- Tuğrul, N. (1944) Büyükçekmece Köprüsü. *Arkitekt*, 149 & 150, 113-14.
- Yücel, E. (1971) Büyükçekmece'de Türk Eserleri. *Vakıflar Dergisi*, 9, 95-106.
- 井谷鋼造 (2005) トルコ共和国イスタンブル市内にあるファーティフ・スルターン・ムハンマド時代のふたつの碑文『アジア文化学科年報』(追手門学院大学文学部) 8.
- 井谷鋼造 (2008) 歴史的なモニュメントの碑刻銘文資料が語るもの —— 西暦 12-15 世紀アナトリアの場合 —— 『史林』 91-1.
- 井谷鋼造 (2009) オスマン帝国のモニュメントに残された刻銘文資料の語るもの —— 西暦 15-17 世紀 —— 『追手門学院大学国際教養学部紀要』 2.
- 岩本佳子 (2012) ルメリのユリユクから征服者の子孫たちへ —— オスマン朝における「準軍人」身分の「遊牧民」の成立と展開 —— 『東洋史研究』 71(3), 131-56.
- 岩本佳子 (2014) オスマン帝国の中の「タタル」 —— 15 から 16 世紀のアナトリアとバルカン半島におけるタタルと呼ばれた集団についての一考察 —— 杉山正明(編)『続・ユーラシアの東西を眺める』京都大学大学院文学研究科, 75-117.
- 澤井一彰 (2006) トルコ共和国総理府オスマン文書館における「枢機勅令簿 Mühimme Defteri」の記述内容についての諸問題 —— 16 世紀後半に属する諸台帳を事例として —— 『オリエント』 49(1), 165-84.
- 高松洋一 (2005) オスマン朝の文書・帳簿と官僚機構 林佳世子・榎屋友子(編)『記録と表象 —— 史料が語るイスラーム世界 ——』東京大学出版会, 193-221.
- 山中由里子 (2009) 『アレクサンドロス変相』名古屋大学出版会.

(井谷剛造：京都大学大学院文学研究科)

(岩本佳子：京都大学文学部非常勤)